

本校の目指す体育学習

～できるか・できないかの面白さを味わう授業づくり～

(1) 指導要領の改訂に見る

現行指導要領の成果と課題

「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視し、体育と保健との一生の関連や発達の段階に応じた指導内容の明確化・体系化を図りつつ、指導と評価の充実を進めてきた。その中で運動やスポーツが好きな児童生徒の割合が高まったこと、体力の低下傾向に歯止めがかかったこと、『する、みる、支える』のスポーツとの多様な関わりの必要性や公正、責任、健康・安全等、態度の内容が身に付いていること、子どもたちの健康の大切さへの認識や健康・安全に関する基礎的な内容が身に付いていることなど、一定の成果が見られる。

他方で、習得した知識や技能を活用して課題解決することや、学習したことを相手に分かりやすく伝えること等に課題があること、運動する子どもとそうでない子どもの二極化傾向が見られること、子どもの体力について、低下傾向には歯止めが掛かっているものの、昭和 60 年頃と比較すると、依然として低い状況が見られることなどの指摘がある。また、健康課題を発見し、主体的に課題解決に取り組む学習が不十分であり、社会の変化に伴う新たな健康課題に対応した教育が必要との指摘がある。」としている。

体育科改訂の要点

- ①運動領域においては、生涯にわたって運動やスポーツに親しみ、スポーツとの多様な関わり方を場面に応じて選択し、実践することができるよう、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の育成を重視し、目標及び内容の構造の見直しを図ること。
- ②「カリキュラム・マネジメント」及び主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を推進する観点から、発達の段階のまとまりを考慮し、各領域で育成することを目指す具体的な内容の系統性を踏まえた指導内容の一層の充実を図ること。
- ③運動やスポーツとの多様な関わりを重視する観点から、体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無等にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有することができるよう指導内容の充実を図ること。その際、共生の視点を重視して改善を図ること。
- ④生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する基礎を培うことを重視し、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」に対応した目標、内容に改善すること。

- ⑤保健領域においては、生涯にわたって健康を保持増進する資質・能力を育成することができるよう、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の内容の一層の明確化を図ること。
- ⑥自己の健康の保持増進や回復等に関する内容を明確化し、「技能」に関連して心の健康、けがの防止の内容の改善を図るとともに、運動領域との一層の関連を図った内容等について改善すること。

目標の改善

「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その課題に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。
- (2) 運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。
- (3) 運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。」

指導要領を見ていくと、“生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する”ことの大切さ、それを実現するための資質・能力を育成することが記されている。

しかし、※₁体育授業における子どもの主体性を「体育授業に特別なもの」としてしまうことで、その体験や経験が地域や家庭において運動・スポーツを楽しむこととつながりにくくなるということがある。そこで、本校では「だれにとっても魅きつけられる、その運動・スポーツの面白さの中心」をしっかりととらえ、発達段階との関係で付与される「運動・スポーツを楽しむための条件」を工夫した「ドキドキ・ワクワク」する体育授業の構築をめざしている。

(2) 子どもの目線からとらえなおした「特性」「技能」

※₂子どもの立場から見た運動の技能とは、そこでみんなが夢中になっている運動という「あること」を、最も合理的に行うやり方を個人が身につけたものと考えることができる。運動の楽しさとは、このような「あること」を行おうとして技能を駆使する、そのプロセスの中に生じる。

※₃「技能」は、運動の特性に触れるためには欠かせない内容である。ただ、これを捉えるとき、それが「技術」であるために一方で客観視を進めてしまい、そ

れが「個人に内面化されたもの」であるがゆえに、他方では主観視を進めてしまう。客観的側面と主観的側面を分けて捉え、実践の中で統合することは大変難しい。「運動の技術」を「こと」として捉えることが、子どもの立場から見た場合に大切となる。

※4「子どもから見た「技能」の意味」は、オリンピック選手から幼稚園の子どもまでに共通の、いわば「最大公約数」にあたる内容である。それに「発達段階」に基づいて「条件」が加わったものが、発達に見合った子どもにとっての運動になる。例えば、水泳の運動の特性は「水の中で、スタートからゴールまで移動することが面白い運動」であるが、そこに高学年だと、例えば「足をつかないで少しでも長く」という条件が加わると、「足をつかないで少しでも長く」＋「水の中で、スタートからゴールまで移動することができるかどうか面白い運動」ということになって、「平泳ぎ」という発達段階に見合った運動が出てくる。このように「発達段階に見合った条件＋運動の特性」が、各学年段階で取り上げられる具体的な運動のすがたになると考えればよい。

(※1・2・3・4：第62回全国体育学習研究協議会 阪神大会 研究委員会問題提起 p3～5

「ドキドキ・ワクワクする楽しい体育授業づくり」(2年次) 研究委員長 松田恵示より)

「運動の特性(その運動が本来持っている、できる/できないの面白さ)」のとらえ方が大切となる。例えば、バスケットボールでは、単にドリブルやパスの面白さを楽しんでいるのではなくて、「ドリブル」や「パス」などの技術(テクニック)を使いながら、「ボールを前に運べるか/運ばせないことができるか」(運動という「あること」を行おうとするプロセス)の面白さを楽しんでいるという考え方が、子どもの目線からとらえなおした技能ということである。

そこで、「立北スタイル」では、

**技能 = 意味(その運動特有の面白さ)
+ 技術(テクニック)**

ととらえ、

**運動の特性 = (できる/できないの面白さ)
運動という「あること」を行おうとして
技能を駆使する【プロセス】の中で生じるもの**

授業づくりを進めていくことにした。

(3) 課題解決学習としての体育学習について

～ 具体的な「めあて」を持つためのプロセスを丁寧に ～

※5 楽しい体育は、「今持っている力」で十分楽しむ中で、もっと楽しみたいという気持ちになり「ここをこうすればもっと楽しくなる！」という技術的・戦術的な課題発見を重視してきた。それは、その時にはじめて、子どもたちにとって課題の意味が生じ、そのことが次の学習の原動力となるからである。

① 課題認識に必要な時間（今持っている力で楽しむ時間）を十分とること
特に球技(ゲーム)の学習においては、ゲームに関連付けられた課題学習となるため、十分にゲームの楽しさを味わわせ、課題認識を深めさせることが必要となる。

② 子どもの発達段階やレディネスに応じて課題発見を導く具体的方法を提示すること。

今持っている力に応じた学習から始まり、より高まった力に応じた学習へと深まっていくためには、個人やチームに応じた技術・戦術的課題とその解決策をしっかりと提示することが必要となる。そのためには、まず、自分たちの課題はどこにあるのかという課題発見のための学習に関する工夫が必要となる。

(※5：第62回全国体育学習研究協議会 阪神大会研究委員会提案

「ドキドキ・ワクワクする体育の新しい学習指導をめざして」p11～12より)

(4) 立北スタイルにおける系統性と系統的カリキュラム

次に運動の系統性についてであるが、「立北スタイル」では上記したような考えのもと、「子どもがその運動の面白さを実感できる状態の高まりとそれに伴い必要となる技術(テクニック)の高まり」を系統性と考えている。これまで研究実践してきたネット型(低学年：ボールゲーム、中学年：ネット型ゲーム、高学年：ボール運動ネット型)の領域を例に述べていく。

(ネット型ゲームの考え方)

本校のボール運動の指導は、運動の特性にもとづいた「局面学習」の考え方で進めている。「局面学習」とは、その運動の「できる／できない」の面白さがどこにあるかをとらえ、主体的に学習し技能や運動の面白さを身に付けさせようとする考え方である。

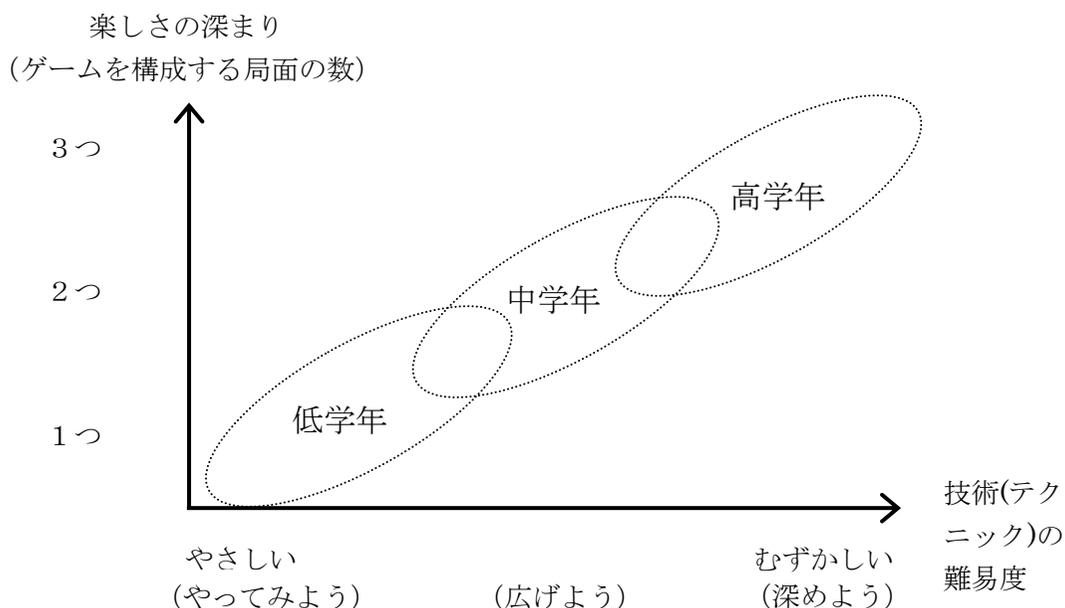
まず、ネット型ゲームにおける特性を、「ボールを味方コートに落とさせないことができるかどうか」「落とさせなかったボールを組み立てる(相手をだます)ことができるかどうか」「ボールを相手コートに落とすことができるかどうか」

という3つの局面から成り立っていると考えた。そして、それぞれの局面における「できる／できない」の面白さと一体に「レシーブ・トス・アタック・ボールへの動き・あいているところを見る動き・味方と一体となって相手をだますコンビネーションプレー」等の技術（テクニク）も高まると考えた。そう考えたときに、いわゆるボールをはじく技術（テクニク）が低い小学生が、その局面の面白さを味わうことが難しい状況であること。言い換えると、その面白さを味わうことを中心に考えると、ボールをはじくことにこだわる必要がないと考え、ボールのキャッチを認める「キャッチバレーボール」を単元化することにした。

カリキュラムについては、児童の発達段階を考え、低学年は「落とさない」から「落とす」を中心とした単元『にんにんバレー』を、中学年は「落とす／落とさない」から「落とす／落とさせない」を中心とした単元『キャッチバレーボール』を、そして、高学年では「落とす／落とさせない」から「組み立てて落とす／落とさせない」を中心とした単元『キャッチバレーボール』を考えた。

また、単元展開は、できるだけやさしいゲームでそれぞれの面白さを今ある能力で実感させ、低学年では、落とさない得点化から落とす得点化の工夫で、中学年は、落とす場所に視点を持たせることで、また、高学年では、コンビネーションを使った組み立てに視点を持たせることで、面白さを広げ、深めるとともに、それに伴う技能の指導を行った。

系統的なカリキュラムの概念図（ネット型）



(5) 立北スタイルにおける単元展開

「立北スタイル」においては、子どもがその運動の面白さを実感できる状態を高め、それとともに必要となる技術（テクニック）が高まるように3つの段階から学習過程を考えた。

【第1段階】 やってみよう（共通のねらいを持った内容）

特性を知る段階。面白さの中身を実感し、やさしく理解する段階。

【第2段階】 広げよう（各自のねらいを持った内容）

身につけた技能をもとに、活動を広げる段階。教師からでも自分からでもいいので、幅を広げていく。

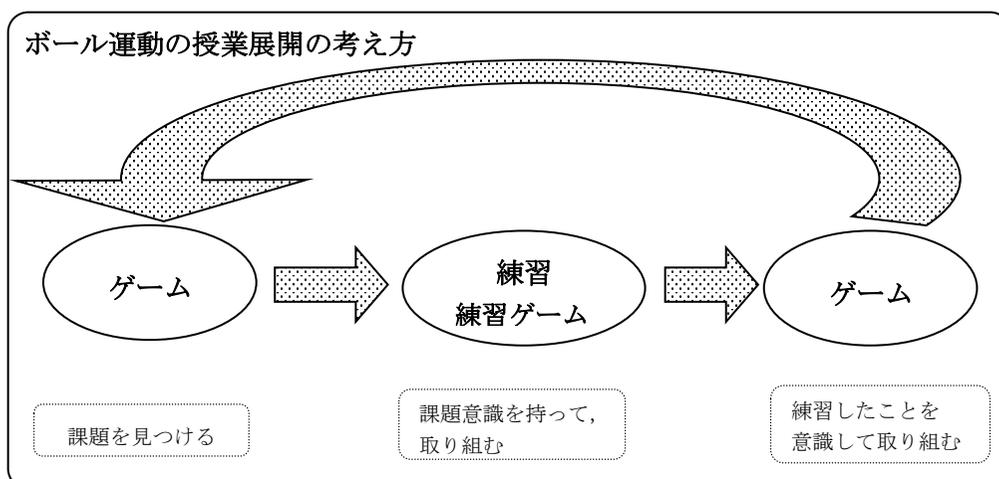
【第3段階】 深めよう（より複雑な内容）

自分やグループで身につけた技能（作戦）を活用し、深めていく段階。

各時間の展開においては、ゲーム→振り返り→練習→ゲームという流れが、連続的に起こるように工夫することを基本的な展開とした。

また、意味と技術（テクニック）がセットになるという視点から、例えばキャッチバレーボールにおいては、その指導を単に技術（テクニック）や「作戦」を型として身につけさせることから行うのではなく、ゲームから子どもの学習課題（内容）を引き出す授業を構成した。

具体的には、「攻防をすること」の面白さとそのための方法を教えるという視点から展開を行い、子どもたち自身が主体的に習得すべき「技能」や「作戦」の意味づけを行えるように考えた。



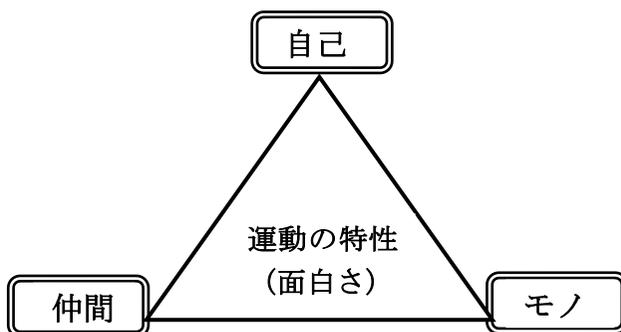
(6) 今年度の実践

① マットを使った運動遊び、マット運動の特性をふまえた授業づくり

器械運動領域においても技術を習得させることが目的ではなく、それを使って運動遊びや運動を楽しみ、生涯体育につなげていく。そのためにマットを使った運動遊び、マット運動の特性をとらえなおし、その特性にふれることができる学習過程を考える。

② 『自己・モノ・仲間』から見た学習過程の工夫

体育で教えなければならないことは、単なる体の動き（技術）だけではなく、『自己・モノ・仲間』が関係して出来上がった運動の世界（特性）である。その『自己・モノ・仲間』から学習過程を工夫する。



低学年・・・『モノの工夫』



中学年・・・『自己の工夫』『仲間の工夫』



高学年・・・『自己の工夫』『仲間の工夫』

